

全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■第4章「東電の敗北」

3月14日午前、福島第一原発2号

機のタービン建屋内に復旧班の松本光弘(47)が電気設備担当者だった。

2日前の1号機原子炉建屋の爆発で、電源車と2号機低圧系配電盤を結ぶ電源ケーブルが傷つき、電源復旧作業が振り出しに戻ったため修復

に来ていたのだ。

また現場に出て大丈夫なのか。松本は現場に出る前の免重重要練

内でのやりとりを思い出していた。

2、3号機の爆発を心配する松本らに、第一復旧班長の稲垣武之(47)は

「悪いなりに状態は安定している。当面、大丈夫だと思う」と言っていた。

つぶれた運転席

2



屋根がつぶれ大破した中央特殊武器防護隊の車両。3号機原子炉建屋の爆発では陸上自衛隊員もけがをした

爆発発音に続き衝撃発音

時一分、3号機の原子炉建屋が爆発した。1号機の爆発とは比較にならないほどの衝撃だった。周囲は粉じんでも見えない。乗るとしていた車まで行くと、飛んだですま」と富岡は言う。爆発発音は、それはもう大きかつあると思つて作業をしていたんで

「1号機が爆発して、もしかする

た。1号機の爆発とは比較にならないほどの衝撃だった。

周りは粉じんでも見えない。乗るとしていた車まで行くと、飛んだですま」と富岡は言う。

爆発発音に続いて天井の方から「ドカン」「ドカン」と衝撃音が何度も響いた。いったい何の音だっつか。

後で分かったことだが、3号機のこの時、2号機タービン建屋と原子炉建屋をつなぐ通称「松の廊下」が、コンクリート片となってタービン建屋に降り注いでいたのだ。

EPCオクリア・エナジー福島第一原発所長の河合秀郎(56)と目立川の爆発でまだ頓挫した。河合は「敷いたケーブルはやらねちゃったし、4人が、懐中電灯の明かりを頼りにケーブルの接続作業をしていた。真つ暗な建屋内に大きな爆発音が

響いたのは、まさにケーブル端末を

接続しようとしたその時だった。共通(敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信 高橋秀樹)

田公男(50)が松本たちと言った。「頼む。行つてくれ」

松本が振り返る。

「1号機の爆発を見ただけに、本音を言えは行きたくない。だけど電源復旧作業って、できる人間が限られて

松本は建屋内で配電盤の絶縁抵抗を確認し終わり、免震棟に戻ると

同僚らと建屋のすぐ脇に止めた業務車に向かった。車まであと10分…。

ズトオオオオオオオ

重く大きな爆発音と、ものすごい衝撃に体が突き上げられた。午前11